

特別寄稿

アメリカ黒人女性の語り継ぎを知る ——「過去の克服」は達成できたか？

岩本裕子

1 はじめに

2018年8月16日早朝（アメリカ時間）黒人女性歌手アレサ・フランクリン（Aretha Franklin, 1942-2018）が亡くなった。危篤状態にあることは数日前のニュースで知らされていたが、訃報は当日の全米メディアのトップで紹介され、夜には特集番組が組まれた。同日、ニューヨークで史料収集中だった筆者が、アレサの訃報を知ったのは、ニューヨーク公立図書館ハーレム分館のションバーグセンターのカウンターだった。

閲覧室での仕事の合間、蔵書貸し出し手続きのためにカウンターの前を通ったところ、アレサが表紙になった『EBONY』（写真1）が飾られ、薔薇の花が一輪供えられていた。「亡くなったの？」となじみの司書に聞くと「ええ、今朝…」と。拙著では随所で言及してきたし、『語り継ぐ黒人女性』では、「第二部 黒人女性という表現媒体 第一章 人生そのものを歌い描く：アメリカ黒人音楽とハリ



写真1

ウッド映画 第一節『ソウルの女王』アレサ・フランクリン」（岩本, 2010, pp.82-91）で重要人物として登場させた。実はこの節題となる前は「オバマのディーヴァ、アレサと『ブルース・ブラザーズ』」だった。

初めての黒人大統領誕生となった就任式で、歌唱披露したアレサに関する拙稿の一部を修正しながら、本稿第4章第3節「追悼：アレサ・フランクリン」を執筆する。本稿の本来の目的は、2017年11月12日に開催された国際基督教大学ジェンダー研究センター公開シンポジウム【「過去の克服」とジェンダー・セクシュアリティ研究】での講演記録を残すことだが、ほぼ1年後に起こった史実に基づいて、加筆することを許されたい。

シンポジウム当日の筆者講演では、まず「自己紹介【拙著一覧】なぜ映画批評か？」として、歴史研究者であるはずの筆者が、なぜ映画批評を繰り返してきたかを説明した。史料とすべきではないフィクションである映画（たとえ史実に基づいた内容であっても）を題材とした拙著4冊を執筆した経緯と、これらの作業によって見えてきたもの、歴史研究への影響や効果なども紹介した。

シンポジウムが開催された2017年秋時点で公開中だった映画Hidden Figures（邦題「ドリーム」）を例に挙げて、1960年代NASAでマーキュリー計画に貢献した人々の間に黒人女性数学者たちがいたという史実を紹介した。原題そのもの「隠れた人々」「表舞台に出なかった貢献者たち」が黒人女性たちだったこと、南部ヴァージニア州で生まれ育った彼女たちの人生が周知されたことは高く評価できる。ただ、アメリカ社会には多くの黒人女性バイオニアが存在することを知らせる「氷山の一角」であることも間違いない。

2 アメリカ社会における黒人女性の位置づけ

2-1 「女性と言えば白人女性、黒人と言えば黒人男性」

文学、音楽、映画、といった分野ではアメリカ黒人女性の功績が大きく、史料も豊富なためか、これらの分野での情報は多く日本に伝わり、研究は進んでいる。いわゆるフィクションの世界での成果は、日本でも興味は深まっている。ところが、彼女たちの歴史が日本で紹介される機会はまだ十分ではない。アメリカ女性史と紹介されるとき、そこに登場するのは中産階級の白人女性が主流、アメリカ黒人史と言うと、事件史か、その事件の中心にいるのは黒人男性がほとんど

である。

この傾向は『*All the Women Are White, All the Blacks Are Men, But Some of Us Are Brave*』（女性と言えば常に白人、黒人と言えば男性、でも私たちにだって勇気のあるものはいる）と題する黒人女性学入門書（Hull, 1982）が出版された1982年頃の合衆国と、現在の日本がさほど変わらないということかもしれない。すでに36年が過ぎている。ただ合衆国においても、大学において歴史研究の領域で黒人女性歴史家が認知されるために、同様の時間を要したのだった。『*Telling Histories: Black Women Historians in the Ivory Tower*』（歴史を語る：象牙の塔における黒人女性歴史家たち）と副題された論文集（Gray White, 2008）が2008年に出版された。編者のデボラ・グレイ・ホワイト（Deborah Gray White）¹を始め、古参歴史家ロザリン・ターボーク＝ペン（Rosaryn Terborg Penn）や、黒人女性に関する数種類の百科事典の編集代表者でアメリカ歴史家協会（OAH）会長経験（2001-02）もあるダーレン・クラーク・ハイン（Darlene Clark Hine）など、錚々たる黒人女性歴史家17人が、「自分史」を語っている。白人主流の学部や大学院での苦労、博士号取得に至るまでの事情など大変興味深い内容になっている。

この論文集は、二人の黒人女性先駆者たちに捧げられている。一人は、本書でも数カ所で紹介したアンナ・ジュリア・クーパー（Anna Julia Cooper）である。アメリカ黒人女性で博士号取得者としては4人目で、歴史学の領域では最初の博士号取得者、1924年にソルボンヌ大学で授与されたのだった。もう一人の黒人女性、マリオン・トンプソン・ライト（Marion Thompson Wright）である。クーパーから遅れること16年、1940年に合衆国で最初に歴史学博士を授与された女性で、授与校はコロンビア大学である。ライトに続いて1940年代に、6人の黒人女性が歴史学博士を取得したのだった。

博士号取得の道がいかに険しいものか、ジェンダーバイアスの厳しい「象牙の塔」で生きぬく苦労なども、同書には紹介されている。まず自分たちが結束することの重要性を自覚したために、ターボーク＝ペンたちの呼びかけで「黒人女性

¹ 2014年8月にラトガース大学を訪問して、ホワイト教授と面談する機会を得た。昼食を共にしながら、この編著に署名を頂くことができた。日本人の黒人女性史研究者の来訪を大変喜んでくれ、その謝辞も加えて下さった。

歴史家学会」(The Association of Black Women Historians, ABWH)が創設されたのは1980年だった。このABWHが、ホームページ上で公開質問状を出した。2011年夏に公開された映画『ヘルプ』(Help)に対してだった。

ニューヨーク・タイムズ書籍ランキングに103週連続ランクインしたベストセラー小説の映画化だった。1960年代前半のミシシッピ州州都ジャクソンを舞台に、白人家庭で家事労働に就く、いわゆる「メイド」の黒人女性たちをめぐる話である。主人公は黒人メイドの本音を1冊の本にして出版した作家の卵の白人女性で、黒人女優たちは助演止まりとなっている。

「黒人女優の演技には敬意を表し、彼女たちに対して異議申し立てするものではない」と前置きして、ABWHの公開質問状は始まった。映画で表現された黒人女性像がステレオタイプで、彼女たちが話す英語も文法的に間違った言葉を使い、きちんとした英語を話すことができない黒人像、白人の子どもたちの「乳母」的な存在としてのメイド像を作り上げている、と非難したのだった。ABWHからの異議申し立てに対して、ネット上では賛否両論の議論が展開されたのだった。

2017年秋に公開された映画『Hidden Figures』に対しては、ネット上の学会HPを確認する限りでは、ABWHからの異議申し立ては見当たらない。黒人女性歴史家たちにとっては、発掘されるべき「過去」として評価に値したのだろうか。

2-2 「カラー・パープル」の変遷²

原作者アリス・ウォーカー (Alice Walker) のピューリッター賞小説『カラー・パープル』(*The Color Purple*) は1982年に出版され、3年後の1985年にスピルバーグ監督によって映画化、映画から10年後の2005年にブロードウェイ・ミュージカル化、さらにその10年後の2015年にリバイバル上演されて、2015年トニー賞最優秀リバイバル賞を受賞した。アメリカ黒人女性の社会的な位置づけを知るために、「カラー・パープル」の変遷を見ていく。

小説は、主人公の黒人女性セリーと、妹ネットティによる書簡体の形をとって

² 本節は拙稿「映画コラム第2回 映画『カラー・パープル』を観て、私の居場所を考えよう！」(岩本, 2016)を加筆修正した。

る。20世紀前半の、南部ジョージア州の農村の黒人社会が舞台である。子どもの頃に生き別れになった姉妹の間で交わされる手紙を通して、最初は字を読むこともできなかったセリーが、女性として、人間として成長していく様子が描かれる。登場人物のほとんどが黒人で、黒人社会内部の女性差別を暴露するような内容だとして、出版当時黒人社会で物議を醸した。

2010年に『タイム』誌が選んだ「20世紀で影響を与えた人物4人」の内、唯一の女性だったのが、オブラ・ウインフレイ（Oprah Winfrey）で、彼女自身は、スピルバーグ監督映画で、男の暴力に決して屈しないソフィア役を演じていた。このオブラが2005年に『カラー・パープル』のミュージカル化を企画し、製作した。

2005年にブロードウェイ・ミュージカルとなって以来、すでに10年が過ぎた2015年に再びブロードウェイに戻ってきた。2016年6月に開催されたトニー賞授賞式で、最優秀リバイバル賞に選ばれたのだった。トニー賞授賞式途中でセリー役をした黒人女優（イギリス人）が絶唱した歌「I'm here」は、映画においてもとても重要な場面で絶叫される。DVが止まなかった夫を捨てて、自宅を出て再出発しようとするセリーが夫に向かってこう叫ぶ。「私は貧しくて、黒くて、そのうえ醜い。でも神様、私は生きている！私は生きている！（I'm here）」と。

アメリカ社会でも、アメリカ黒人社会においても、最下層に追いやられて厳しい状況に置かれてきた黒人女性は、その現状に屈服することなく、立ち上がる力を持つ。「強く生まれたわけじゃない。強くならざるを得なかっただけ」という、ある黒人女性の言葉は、筆者が30年間、黒人女性研究者を続けてこられた原動力となった。誰も生まれながらにして強い人はいない、強い心を持って生きていくことで、自らの生きる（I'm here）ことを受け入れていく。

映画やミュージカルの議論のあとだが、原作者アリス・ウォーカー自身の主張を確認しなければならない。すでに『カラー・パープル』出版の12年前の1970年に『グレンジ・コーブランドの第三の人生』（*The Third Life of Grange Copeland*）において、同様の問題提起を始めていた。妻子に対して精神的DVを冒したあとに家庭を捨てた主人公グレンジと、その息子ブラウンフィールドが成人し、身体的DVの果てに妻子を殺害までしてしまう…というタイプの異なる二人の黒人男性小作人を通して、ウォーカーは黒人家庭で男性はどうあるべきかの問題提起を

したのだった。

この5年後の1975年にヌトザケ・シャンゲ (Ntozake Shange) が『死ぬことを考えた黒い女たちのために』(For Colored Girls Who Have Considered Suicide/When the Rainbow Is Enuf) と題された舞踏詩を発表した。「少女であったこともない女の／女であることについての暗い言葉」は象徴的な表現だろう。貧困故に子どもの頃から働かざるを得なかった女たち、身近な男による強かんによって少女期を失った女たちを表している。自殺を考える事態に追い込まれた黒人女性たちを詩に詠み込んで、黒人社会の内部告発をしたのだった。

こうした社会的土壌が整った1982年に『カラー・パープル』は登場した。黒人男性たちから内部告発だと批判されたことに対して、アリス・ウォーカー自身は次のように答えた。「黒人男性がひどい目にあってきたのは万人の認めるところです。…だからといって彼らの黒人女性や子供への家庭内暴力を見逃すわけにはいきません。黒人女性がその暴力に対し、黙っていることを期待されるのも困ります。…白人社会が黒人になした抑圧を批判するなら、黒人社会の中で生み出された抑圧にも厳しい目を向けるべきです」と。

小説出版から3年後の1985年に映画化されたが、映画を見た視聴者からの反応についてウォーカーはこう語っている。「実際に乱暴され、悲しみのどん底にいた女性が、この映画を37回観て勇気を得た、と書いてきました。また刑務所にいる男たちからも手紙をもらいました。妻を虐待し、殺した男、幼児を強かんした男、かれらに共通しているのは父親の暴力を目にして育ったことです。だから、人間として他にどう振る舞うかなど知る由もなかった、と言ってきました。こういった人々からいただいた手紙の重さを考えたとき、一部のかたがたの『カラー・パープル』批判はたいして重要でなくなります」と(岩本, 2010, p.162)。

3 イザベラからオプラ・ウィンフレイ、さらにミシェル・オバマへ

3-1 アメリカ黒人女性の「はじめて」——イザベラかアンジェラか?³

南北アメリカ大陸へヨーロッパ人がアフリカ人を運んできた、という事実がア

³ 本節は拙著『物語アメリカ黒人女性史(1619-2013) 絶望から希望へ』の第1章「奴隷制時代の黒人女性[一六一九～一八〇〇]」の一部(岩本, 2013, pp.12-15) から引用し、加筆修正した。

メロカ大陸の黒人の最初で、現在のアメリカ合衆国となる北米英領植民地に、最初のアフリカ人が運び込まれたのは、1619年8月とされている。2019年で400周年を迎えることになる。

ジェイムズタウン植民地の海上に突然、一隻の船が姿を現した。1607年にイギリスの植民者たちがヴァージニアに上陸し、北米に本格的な植民を始めていた最初の場所であった。植民地人は驚いて、入港したその船の投錨を見守った。オランダ船で、船には20人のアフリカ黒人が積み込まれていた。確かにこのオランダ船の積み荷ではあったが、元々はスペインの奴隷船から盗み出されたもののようだった。

オランダ船の船長は、食糧に欠乏していて、自分たちのための食料とこのアフリカ黒人たちを交換したいと交渉し始めた。取引はすぐに成立し、この船の中からは、アンソニー、ペドロ、イザベラといったスペイン名で呼び出された。アフリカ黒人がジェイムズタウン植民地に上陸した。これがアメリカ黒人の「はじめて」であった。

ピルグリム・ファーザーズ（巡礼始祖）が、後にプリマスと名付けることになる場所に到着するよりも1年前、正確に言うとは16カ月前のことであった。今日のアメリカ黒人たちが、自分たちは「白人より早く」アメリカ大陸に「連れてこられた」という由縁はこの歴史的事実にあった。

ヨーロッパ諸国の力関係で海洋覇権国は次々変わりながら、多くの国々によって大西洋を舞台に「奴隷貿易」は展開された。俗に三角貿易と呼ばれ、ヨーロッパ本国からアフリカ西岸へ、アフリカから西インド諸島を経て本国へ戻するという三角形をなす航路では様々な品物が行き交った。その中で必ず同じ「もの」が通過した航路があった。この航路は特に「中間航路」(middle passage)と呼ばれ、悪名を馳せた。アフリカ西岸から西インド諸島への航路のことで、船には「黒い積み荷」(black cargo) が所狭しと積み込まれていた。奴隷であるアフリカ人は人間ではなく、積み荷にすぎなかった。

1619年にオランダ船によって運ばれた積み荷は20人で、そのうち女性は3人であった。アメリカ黒人女性の「初めて」である。彼らは自由ではなかったが、奴隷ではなく「年期奉公人」の扱いを受けた。以後80年近く続く年期奉公人制度はヨーロッパからの白人に適応した制度となり、アフリカ人は年季があけても

自由になれず、奴隷制度へと移行したのだった。

黒人女性にとってもこの積み荷運び込みが「はじめて」であり、イザベラと呼ばれたこの女性が、最初のアメリカ黒人女性となった。残された史料のなかには、最初の黒人女性はアンジェラという名前だった、とするものがある。ジェームズタウンに運ばれた3人の内の1人というわけではなく、乗せられていたアフリカ人は、アンジェラ1人だけだった、と史料にはある。しかもこの船はオランダ船ではなくイギリス船で、「トレジャラー」(Treasurer)と船名まで明記されていた。

1619年の初夏、イギリス船トレジャラー号は、植民地に山羊、塩、その他の食糧を運ぶために、ヴァージニア植民地を出航したらしい。出航間もなくオランダ船と落ち合い、共に航海しながら、入念に事故を装い、スペイン帆船とぶつかったのだった。この帆船は、西インド諸島へアフリカ人を奴隷として運び込む、いわゆる奴隷船で、トレジャラー号とオランダ船の乗組員たちは、このスペイン帆船から奴隷たちを盗み出したのだった。

盗みに成功した2隻はこの後、悪天候のために合流することはなく、それぞれ単独航海に入ってしまった。オランダ船の方は、食糧や燃料が事切れて、すでに紹介したように、8月にジェームズタウンへ入り、船底に入れてあったアフリカ人20人を食糧や燃料との交換交渉に使ったのだった。実は、当初スペイン船からアフリカ人を100人ほど盗んでいたものの、途中の悪天候や食糧不足で、残ったのはわずか20人だったのである。

一方、トレジャラー号はどうなったかという、やはりアフリカ人を多く盗み出したはずが、ヴァージニア植民地に入港したときに船内に生き残っていたアフリカからの積み荷は、わずかに一つだけ、それが、アンジェラと名付けられた女性であった。この史料が確かであれば、アンジェラもイザベラも、同じスペイン帆船によって運び込まれたアフリカ人女性ということになる。このアンジェラのその後に関する記録はないが、次に説明するイザベラ同様、奴隷としてではなく年季奉公人として使われただろうと推測される。

イザベラはこの後、同じ船で連れてこられたアンソニーと結婚した。二人の間には、ウィリアムと名付けられる男の子が生まれた。1623年か1624年のことだったが、この親子3人の名前は公式記録には残っていない。植民地内で親子で自由

の身になったのかも知れないが、定かではない。ただし、イザベラがウィリアムを出産したことによって、英領北米植民地において最初の黒人家族が誕生したことは間違いのない史実となる。

3-2 ミシェル・オバマ——「サウスサイドガール」からファーストレディへ⁴

ミシェル・ラボーン・ロビンソン・オバマ (Michelle La Vaughn Robinson Obama) が、第44代オバマ大統領夫人の正式名である。ロビンソンはいわゆる旧姓だが、ミドルネームである「ラボーン」(La Vaughn) は、父方の祖母の名前をもらっていた。ロビンソン家は、生まれた子どもに先祖の名前を付けることを好んだ。血縁の大切さを名付けによって子どもたちに伝えるためだった。

2015年3月、ミシェルは初来日した。2014年4月にバラク・オバマ大統領が「国賓」として訪日したときには、夫人は娘の学校行事を理由に同行しなかったもので、初来日となった。ミシェル夫人の今回の訪問の目的は、女子教育の重要性を訴えることや、合衆国政府系のボランティア組織「ピースコー：Peace Corps (平和部隊)」と日本の青年海外協力隊の連携を通じて、日米の協力強化を促すことだった。

平和部隊は1961年、ケネディ大統領によって提唱された組織で、開発途上国へ隊員を派遣して、開発援助することを目的としている。現在まで多くのアメリカの若者たちが、世界の平和のために世界各地の開発途上国で積極的な活動を続けている。

ミシェル夫人は3月18日から2日間東京に滞在して、20日に京都を訪問した後、同じ目的でカンボジアを訪問した。世界各地で女子教育への支援を拡大することが、ファーストレディ、ミシェル夫人の大きな「使命」でもあった。

ミシェルが生まれた1964年1月17日の半年後には、ケネディ大統領暗殺後に副大統領から昇格したリンドン・B・ジョンソン大統領が、公共施設や公営住宅において人種差別を禁じるという公民権法に署名した。

確かに時代は動いていたとはいえ、底辺にいる黒人たちが社会の階段を上るためには、大いなる努力を要したのだった。懸命で賢明な両親のもとで、ミシェル

⁴ 本節は拙著の一部(岩本, 2010, pp.62-79; 岩本, 2013, pp.264-290; 岩本, 2015) から引用、加筆修正した。

は兄クレイグとともに、ロビンソン家の子どもとして、着実に確実に階段を上るための努力を惜しまなかった。障害があった父は、「浄水場作業員」という市職員の給料で子ども二人をプリンストン大学に進学させたことを誇りに思っていた。

ミシエルの父親の正式名は、フレイジャー・ロビンソン3世だった。その父も同名で2世（ジュニア）、祖父つまりミシエルの曾祖父がフレイジャー・ロビンソン1世だった。曾祖父は1884年にサウスカロライナ州ジョージタウンで生まれている。南北戦争が終わって20年近く経った頃で、奴隷ではないが、奴隷時代以上に厳しい差別が始まった「どん底時代」の生まれということになる。ミシエルから4世代前にさかのぼる、フレイジャー1世の父親ジムや母親ルイザは奴隷世代で、ミシエルは確実に「奴隷の子孫」となる。

バラク・オバマはアメリカ白人の母親と、ケニア人（黒人）の父親との間に生まれた。「血の一滴ルール」に従い人種的に黒人であることは間違いないが、アメリカ黒人社会から受け入れられるには、高い壁があったのである。バラクを黒人社会に受け入れるにあたって、まず妻であるミシエルが「奴隷の子孫」であったことは大きい。ミシエルとバラクの間に生まれたマリアとサシャは、当然ながら「奴隷の子孫」である。

ミシエルの曾祖父フレイジャー・ロビンソン1世は、1936年に亡くなるまで、ジョージタウンで片腕のない真面目な窯焚き労働者として生涯を終えた。ローザと結婚して4人の子どもをもったが、その一人であったフレイジャー2世は、1934年までにジョージタウンでの所帯をたたみ、サウスカロライナ州を去って、当時の多くの黒人たちがしたように「北上」することを選んだ。目的地はミシガン湖畔のシカゴだった。

この時代の流れにのるように、ミシエルの祖父フレイジャー2世は、生まれ故郷のサウスカロライナ州ジョージタウンをあとにして、北部都市シカゴへ移った。フレイジャー3世は、2世がシカゴへ移動後に生まれたので、北部生まれとなる。シカゴ市職員として浄水場で働いた。仕事はボイラー室の夜勤だったが、30歳の時に多発性硬化症と診断されたあとも、懸命に毎日の仕事を続けた。健康を損ないながらも仕事を辞めず、その給与で、クレイグとミシエルの二人の子どもたちを東部の難関校、プリンストン大学に進学させ、卒業させたのだった。家族にとって「闇を照らす灯台」のような存在であった父親フレイジャー、「地

の塩」のような女性だった母親マリアンという両親を、二人は心から尊敬して、その誇りとなりたいと努力を重ねた兄妹だったのである。

2008年8月25日、コロラド州デンバーで開催された大統領候補指名が行われる民主党大会初日に、ミシェルはスピーチを行った。ミシェルの登場を紹介したのは、ミシェルの兄クレイグだった。スピーチ前に放映された人物紹介ビデオは、ミシェルの生い立ちを強調した「サウスサイドガール」と題された。

登場したミシェルのスピーチは、これまで選挙戦を闘ってきたなかで、常に話してきた内容で始まった。自分自身がシカゴでもサウスサイドと呼ばれる黒人居住区で生まれて育ったということである。「私はシカゴのサウスサイドで、労働者階級の家庭で育ちました。高校を卒業するまでは、仕事を終えて帰宅した母が私たちの面倒を見てくれました。父は夜勤労働者でしたが、終生私たちを大切にしてくれました。私の人生に驚異的なことが一つあるとしたら、それは、父が市職員の給与で4人家族をきちんと養ってくれたことです」ミシェルのこの言葉は、彼女の人生を象徴し、両親への敬意と誇りを感じさせる見事な表現と言えるだろう。

ミシェルとバラクがまだ仕事上のつながりだけだった頃に、シカゴのサウスサイドにある恵まれない地域、アルトゲルド・ガーデンに行くバラクと一緒にミシェルも出かけたことがあった。バラクはコロンビア大学を卒業後、すぐに法科大学院へ進学したわけではなく、このサウスサイド地域で教会を拠点とするコミュニティ組織者の仕事をしていたのだった。当時シカゴの公営住宅企画に携わり、成果も上げたが、それだけでは満足しなかったバラクは法科大学院進学を決めたのだった。

ハーバード法科大学院生として、シカゴにあるシドリー・オースティン法律事務所の夏期学生勤務弁護士の仕事をしながらも、かつてのコミュニティ組織者としての仕事を基盤として、地域の人々に向かって「自分たちに不利な状況にあるときには、現状を変えるために全力をつくそう」と住民たちに語りかけるバラクを見たミシェルは、彼に魅了されてしまったのだった。

のちにミシェルが、バラクのことを尊敬する理由の一つとして、次のようなことを語っている。「多くを与えられた者は多くを求められる」ということを実践して、恵まれた人は恵みの上にあぐらをかいてはいけない、その恵みをどのよう

に活用すれば、より多くの人々に分け与えられるかを、バラクは理解しているからだ。

ハーバード法科大学院卒業時点で、バラクに対してシドリー・オースティンから当然のように正式採用の話はあったが、バラクはそれを断った。市民運動や社会改革に対する意識の高いバラクは、企業法曹界ではなく、公民権関連の法律事務所を就職先とした。シカゴにあるバーンヒル・ガラント法律事務所に勤め、シカゴに根ざし、コミュニティと教会の一員になることを選択したのである。

結婚して6年目の独立記念日に、ミシェルは長女マリア・アンを出産した。その3年後、2001年に次女ナターシャ（愛称サシャ）を出産し、彼女は二人の娘の母親であることを最も大切な仕事だと考えた。兄クレイグとミシェルという二人の子どもを慈しみ育ててくれた両親のことを考えると、当然のことだったかもしれない。「親から自分に与えられたことを、自分は子に返す」ことを実践したのだろう。まさに語り継ぎである。

ミシェルに「あなたは誰？」と人が聞けば、「マリアとサシャの母親」と答えるだろう原点はここにある。ただ、政治家をめざす夫を持って「政治家の妻」の役目が増えるときに、助けになるのは、ミシェルの母、マリアとサシャの祖母、マリアンだった。

バラクは1996年に、イリノイ州議会上院議員の座を獲得後、わずか3年で連邦上院議員に立候補した。時機が熟していなかったため、人気ある現職には勝てず敗北したが、その4年後の2004年の選挙では圧勝したのだった。同年の大統領候補者指名のための民主党大会はボストンで開催されたが、この党大会で基調演説をしたのがバラクだった。「大いなる希望」と題されて、今や伝説的な演説となったのが、このときの基調演説である。バラクをイリノイ州選出の連邦上院議員にしたばかりか、その4年後には大統領選挙に名乗りを上げることになる、まさに画期となった瞬間であった。

3-3 民主党政権を支えた黒人票——大統領就任式での黒人女性の芸能披露⁵

大統領就任式において、祝賀歌唱が行われた先例として、1957年のアイゼン

⁵ 本節は拙著の一部（岩本, 1999, pp.58-59; 岩本, 2010, pp.10-29; 岩本, 2013, pp.173-175）から引用、加筆修正した。

ハワー大統領、1961年のケネディ大統領の2例をあげられる。二人の就任式はともに、国歌歌唱で、歌ったのはマリアン・アンダーソン（Marian Anderson）だった。彼女に関しては、アレサの節で言及する。アンダーソンの歌唱から30年後の1990年代の就任式を見ていく。

ウィリアム・ジェファソン・クリントン（William Jefferson Clinton）大統領が2回行った大統領就任式の祝賀式典はいずれも黒人女性に晴舞台を提供したのだった。1993年の第一期就任式で、舞踏家や女優として活躍する詩人マヤ・アンジェロウ（Maya Angelou）は、「朝の脈動」（On the Pulse of Morning）と題する詩を詠んだ。大統領就任式で詩が詠まれたのは1961年のケネディ大統領就任式以来だった。北アメリカ大陸の「岩と河と木」が世界各地から到着した様子を詩にしたものだが、それらは皆、様々な人種や民族を象徴していて、彼らを迎えた合衆国を讃えたものだった。

「朝の脈動」は小冊子ばかりか、マヤ自身の朗読録音テープも販売された。このテープではマヤによる詩をめぐる説明がなされる。「岩と河と木」にまつわる黒人霊歌にヒントを得て作られ、黒人霊歌のさわりがマヤ自身によって歌われた。まず「岩」に関する霊歌は「隠れ屋もない」と訳されるが、原題は黒人英語をそのままに“Dere’s No Hidin’ Place Down Dere”である。「河」に関する霊歌では有名な「深い河」（Deep River）を歌っている。最後の「木」では「私は木のように根を生やしてじっと動かない」と最後に歌われる黒人霊歌を歌った後に、「私の祖母が大好きだった曲」との説明を加えていた。母ではなく祖母によって育てられた生い立ちのマヤだったが、母性にあふれた彼女の朗読を聞くだけで、そのあたたかさ、強さ、やさしさに包まれていくようである。

1996年に無事再選されたクリントン大統領は、翌97年1月の第2期就任式でも黒人女性に晴舞台を用意し、世界的なオペラ歌手ジェシー・ノーマン（Jessye Norman）を選んだ。彼女は国会議事堂を背にして高らかに「Amazing Grace」と「America the Beautiful」を歌った。この民主党政権発足先例にあやかっただのか、オバマ大統領は自身がファンだというアレサ・フランクリンの歌唱を望んだ。就任式でアレサが歌った曲は「America (My Country ‘Tis of Thee)」だった。後述する。

4 アメリカ黒人女性たちとの出会い

4-1 アフリカ系アメリカ人南北戦争博物館 (Washington D.C. 北部) で出会った絵

2013年3月、12年半ぶりに首都ワシントンを訪問した筆者の主目的は、近著『物語 アメリカ黒人女性史 (1619-2013) ——絶望から希望へ』(明石書店、2013年6月)出版に向けての史料収集のためだった。わずか4日間の滞在後、ニューヨークへ移動するまで、近著の初校チェックをする時間もなく、ひたすら必要な資料の確認や写真撮影を続けた。

初めて訪問した1989年以来、筆者にとって重要な史料収集地(国会図書館、ハーワード大学など)であり続けたワシントンにおいて、黒人史関連の施設(メアリ・マクロウド・ベシューン博物館、フレデリック・ダグラス記念館など)や博物館を訪問することも重要な仕事として重ねてきていた。2000年以来13年ぶりの訪問となった2013年3月には、Uストリート(U Street)と呼ばれる黒人文化の発信地を初めて訪問することとなった。ニューヨークで言えば、125丁目(キング牧師大通り)のような場所だった。

そこに創設されたばかりの「アフリカ系アメリカ人南北戦争博物館」を訪問でき、拙著出版に関して大きな収穫となった。本文で使用した写真は当然ながら、カバーには6枚の写真を用いたが、6枚全てがワシントンで撮影されたもので、2020年には20ドル紙幣の図柄となるハリエット・タブマン(Harriet Tubman)の立像は、アフリカ系アメリカ人南北戦争博物館で写したものである⁶。

本節では、この博物館で出会った1枚の絵を説明したい。きちんとした展示物ではなく、洗面所へ向かう廊下に飾ってあった鉛筆画である。絵のタイトルは『Black Women Who Changed America』で、筆者としてはこの絵をカバーに用いたいと思ったが、売店で絵葉書となり販売されているが、タイトルのみで作者の名前は記載されておらず著作権取得が困難と考え断念したのだった。ただ、拙著には非常に重要な絵だったため、絵葉書を紹介するという目的で第5章の最終頁(p.236)に掲載した。

⁶ 2020年に米20ドル紙幣の図柄が現在のアンドリュー・ジャクソン大統領から変更され、ハリエット・タブマンが選ばれたというニュースを受けた2016年に拙稿「2016年夏におけるアメリカ黒人女性の諸相: ハリエット・タブマンから『カラー・パープル』まで」(岩本, 2017)を残した。

この鉛筆画には12人の黒人女性が描かれていて、最初に見たとき、思わず拙著で言及した148人の中にいるかどうか一人一人確認してしまった。当然ながら「アメリカを変えた黒人女性」と題された12人全てが拙著で紹介済みであった。その12人をなぜアメリカを変えたかの肩書きを加えて以下に紹介しておく。拙著での番号に従う。

1.「奇妙な果実」を歌ったビリー・ホリデイ 2.全国黒人女性会議会長ドロシー・ハイツ 3.反リンチ運動家アイダ・B・ウェルズ 4.黒人女優の草分けレナ・ホーン 5.地下鉄道総司令官「女モーセ」ハリエット・タブマン 6.黒人女性初の連邦下院議員シャーリー・チズム 7.「公民権運動の母」ローザ・パークス 8.オバマを大統領にした女性オブラ・ウィンフレイ 9.最初の黒人従軍看護師スージー・テイラー 10.最初の黒人女性新聞記者メアリ・シャッド・キャリー 11.「ミシシッピの最も怒れる女性」ファニー・ルー・ヘイマー 12.南部出身の黒人女性政治家バーバラ・ジョーダン

12人いずれもが、肩書きに「はじめて」が付く草分け的黒人女性で、まさに絵のタイトル「アメリカを変えた黒人女性」そのものであることは間違いない。

4-2 国立アフリカ系アメリカ人歴史と文化博物館——NMAAHC⁷

首都ワシントンの中心地は、「モール」と呼ばれて、様々な記念館が建って、首都観光の目玉建築が林立している。モールのど真ん中、まさに首都の中心地に立つのは、初代大統領ジョージ・ワシントンを記念したワシントン・モニュメント（1888年一般公開時点で、169メートルの世界で最も高い建造物）で、そのそばに国立アフリカ系アメリカ人歴史文化博物館（NMAAHC）が完成し、一般公開されたのは2016年9月だった。

2017年8月に訪問した筆者は、4時間かけて見学した後、映画上映会場で『8月28日』（August 28: A Day in the Life of a People）と題された25分間のドキュメンタリー映画も見ることができた。監督はエイヴァ・デュヴァーネイ（Ava Du Vernay）という黒人女性で、2014年公開映画『Selma』（邦題『グローリー／明日への行進』）も彼女の監督作品である。キング牧師が主人公で、1965年、

⁷ 本節は拙稿「映画コラム第12回『もう9月ですが…ドキュメンタリー映画「8月28日」』（岩本, 2018a）を加筆修正したものである。

アラバマ州セルマで起こった「血の日曜日事件」を題材に、苦悩し、闘った人々を描いた作品だった。

このキング牧師を世界的に有名にしたのは、1963年8月28日に行われたワシントン大行進で、演説“I have a dream” speechで知られる。1963年以外にもあと4件、同じ8月28日に黒人史にとって重要な出来事が起こっていた。古い順に箇条書きすると、

- 1) 1833年、大英帝国の領土内での奴隷制度廃止を議会が決定した。
- 2) 1955年、ミシシッピ州モーネイで、シカゴから来た少年エメット・ティル虐殺された。
- 3) 2005年、ハリケーン・カトリーナ上陸でニューオーリンズ黒人居住区に甚大な被害
- 4) 2008年、バラク・オバマが民主党全国大会で大統領候補者指名を受けた。

これらの5つの歴史的事実を、ハリウッド俳優による演技を交えながら紹介し、偶然同じ日に重なったアメリカ黒人史についての「画期」を確認した。

歴史を知っている人は知らない人に伝える義務があり、過去をふまえて未来を見すえなければならない。次世代に語り継ぐことは、今を生かされている私たち皆が続けていかなければならない。過去を忘れて未来がないことは当然のことである。

4-3 追悼——アレサ・フランクリン⁸

2009年1月20日オバマ大統領第1期就任式において、大統領がファンだということで祝賀歌唱を依頼された「ソウルの女王」アレサ・フランクリンは、誇らしく高らかに歌った。アレサが選んだ曲は、1939年にマリアン・アンダーソンが、リンカン記念堂前で開催された野外コンサート（黒人歌手のためコンサートホール使用を拒否されたことでFDR大統領夫人のエリノアが野外コンサートを企画）で歌った曲の一つ「America (My Country 'Tis of Thee)」だった。初めての黒

⁸ 本節は拙著『語り継ぐ黒人女性：ミシェル・オバマからビヨンセまで』第2部「黒人女性という表現媒体」の第1章「人生そのものを歌い描く：アメリカ黒人音楽とハリウッド映画 第一節『ソウルの女王』アレサ・フランクリン」の一部（岩本, 2010, pp.82-91）を引用し、加筆修正したものである。

人大統領を称える黒人女性歌手としては、意味のある選曲となっただろう。

アレサはバプティスト教会の有名な牧師の娘として、1942年にテネシー州メンフィスで生まれた。育ったのはミシガン州デトロイトだった。父はC・L・フランクリン牧師、母は歌手でピアニストのバーバラ・シガーズだった。アレサは生まれつきピアノの才能があり、神童のようだった。歌の才能も合わせ持ち、早くから音楽業界に入って、14歳の時には最初のアルバムを出していた。1960年代の終わりには、「ソウル・シスター・ナンバー・ワン」と呼ばれるようになり、現在の形容表現「ソウルの女王」の基盤を作っていた。1968年の「RESPECT」で最優秀リズム＆ブルース（R&B）録音賞を取ったことを皮切りに、R&B部門ばかりか、ゴスペル部門でも受賞し、グラミー賞18個を受賞した。合衆国で民間人に対するもっとも名誉ある勲章、大統領自由勲章を、アレサは2005年に受賞した。

アレサが登場する映画の代表的作品は、『ブルース・ブラザーズ』（Blues Brothers）だろう。1980年に映画化されて、ブルース好きにとって伝説の作品となった。1998年には続編『ブルース・ブラザーズ2000』が作られた。前作へのオマージュの部分がちりばめられて、ファンには大満足の作品となった。アレサ・フランクリンは、2作とも同じ役柄で登場した。ギター・プレイヤーのマット・マーフィーの妻役で、役名「マーフィー夫人」である。夫のマーフィーは、妻の許しを得て仕事を中断して、ギタリストとしてブルース・ブラザーズ・バンドに参加するのだった。アレサの役は、前作ではソウル・フード屋の女主人だったが、18年後には少し出世して車会社の女社長になっていた。アレサが歌うときに3人の黒人女性がバック・コーラスでつくのは、2作に共通する。

前作でこの4人が歌い踊ったのは「THINK」だった。1968年米国ヒットチャートで第7位、米国R&Bでは第1位を獲得したアレサの大ヒット曲だった。続編で自らの車会社内でアレサがバック・コーラスとともに歌ったのは、「RESPECT」だった。これは、1967年第1位を獲得した大ヒット曲である。続編映画公開の1998年のグラミー賞授賞式では、ブルース・ブラザーズの主役4人が、黒の背広と黒いサングラスで登場して、「ソウルの女王」とアレサを紹介した。アレサと4人の男性たちが、ステージで「RESPECT」を絶唱し、「ソウルの女王」健在ぶりを示していた。



写真2



写真3

2018年8月ニューヨークでの筆者の仕事最終日にアレサが亡くなったことは「はじめに」で言及したが、このとき話した司書が「ハーレムの習慣として、こうした偉大なミュージシャンが亡くなると125丁目のアポロ劇場では一晩中追悼の時間がもたれる」ことを教えてくれた。ニューヨーク中から125丁目に人が集まり追悼することを知り、筆者も仕事を早く切り上げて訪ねてみることにした。そのときの写真を掲載しておく（写真2+3）。日も暮れる前だったが、すでに多くのファンが集まり、アレサの歌を流して集った皆が歌っていた。先を急ぐ筆者はここまでだったが、この日の夜のニュースでは深夜になっても人が絶えない様子が中継されていた。

翌日ニューヨークを出て帰国する2018年8月17日の朝刊各紙では、アレサへの追悼記事が掲載された。各紙第1面には往年のアレサの写真がカラーで掲載され、「ソウルの女王」(Queen of Soul)の賛辞が大見出しになっていた(Morris, 2018, p.1,19; N.N., 2018, pp.2-5; N.N., 2018, pp.2-9)。帰国する機内で流れていた日本時間17日朝のニュースでは、アレサの逝去が報じられていた。

アメリカ時間8月31日に、デトロイトのグレート・グレイス・テンプルでアレサの葬儀が行われた。多くの芸能人が弔辞を読み、追悼した中でステイーヴィー・ワンダーがまず「The Lord of Prayer」の悲しみに満ちたハーモニカ・バージョンを演奏したのち、「神の恩寵」がなければ「こんな素敵なクイーンと出会うことはなかっただろうし、彼女が与えてくれた喜びを感じることもなかっただろう」と、フランクリンへの追悼の辞を述べた。「生命に与えられた最高の贈り物は愛だ。間違っていることばかり話すこともできるし、そういうことは本当に

たくさんある。しかし、私たちを自由にする唯一のものが愛だ」とワンダーは続けて「再び愛を偉大なものにすることが必要がある」と「ソウルの女王」を唄んだ。

さらに「彼女は本当に素晴らしい音楽を奏でた驚異的なシンガーだった。彼女はすべてのジャンルを網羅し、彼女の歌い方はすべてのシンガーに影響を与えた。そんなシンガーたちは今後も永遠に彼女から影響されるだろう。彼女の声、彼女のエモーション、彼女の誠実さはいつまでも記憶に残るのだから」とも語ったと伝えられる。

5 おわりに⁹

2017年秋に、ハリウッドでいわゆる「セクハラ」(sexual harassment) 告発が起こった。ハリウッド女優たちが、長い間の「沈黙」を破って声を上げ、勇気を持って最初に告発した女性を孤立させず、「自分もそうだ」と賛同し、一つの運動に結びつけていった。ネット空間では#ME TOO 運動と呼ばれて、その運動を支える俳優たちが、セクハラを「もう終わりにしよう」(Time is up!) と支援も続けるようになった。世界中にこの運動が周知されたのは、2018年1月7日に開催されたゴールデン・グローブ賞授賞式だった。参加した女優たちは皆黒いドレスを身にまとい、俳優たちはTime is up! のバッジをつけて集った。

同賞が設定する「セシル・B・デミル生涯功労賞」受賞者によって#ME TOO 運動が、世界へ発信されたのだった。1年前のトランプ大統領就任直前に開催された2017年1月にメリル・ストリープが受賞した¹⁰「セシル・B・デミル生涯功労賞」を2018年に受賞したのは、バラク・オバマを大統領にしたと評価された黒人女性オブラ・ウィンフレイだった。メリル・ストリープ同様、オブラ・ウィンフレイは世界中に勇気を与える受賞スピーチを行い、#ME TOO 運動を世界に発信したのだった。

アメリカ合衆国の世論を動かす力のあるオブラが、20年以上前にある雑誌のインタビューで「なぜあなたはパワフルなのか」と質問されて、「人によってパワーの意味が違おうだろうが、私は自分の直感を信じる。自分にとっての真実を維

⁹ 本節は、拙稿(岩本, 2018b; 岩本, 2018c)を引用し、加筆修正したものである。

¹⁰ メリル・ストリープのエピソードについては、拙稿『映画コラム第6回『第89回アカデミー賞授賞式分析2：女優メリル・ストリープ』』(岩本, 2017b)を参照されたい。

持しようと思うし、その真実が他の人に影響を与えることを自覚している。…私の人生や私が困難を克服する様子を見てくれているファンに『あなたにできたのだから私にもできるわね』と言ってもらいたい」と応えたのだった。

「あなたにできたのだから私にも」と発想できる黒人女性にめぐり会うたびに筆者は、彼女たちの明日を信じる力に感動してきた。彼女たちが苦難の過去を生き抜くなかで備わった包容力や癒しの心は、未来を拓く自信を生み出す源泉になっているのだろう。過去を克服していこうとするアメリカ黒人女性の「語り継ぎ」は、人種も国籍も血縁も超えて、日本に暮らす我々にも届くと確信する。

References

- 岩本裕子. (1999). 『スクリーンに見る黒人女性』. 東京: メタ・ブレーン.
- 岩本裕子. (2006). 「第1章 黒人社会におけるドメスティック・バイオレンス: 文学とブルースと映画を手がかりに」. 『立教アメリカン・スタディーズ』. 28号, 108-109, 119.
- 岩本裕子. (2010). 『語り継ぐ黒人女性: ミシェル・オバマからビヨンセまで』. 東京: メタ・ブレーン.
- 岩本裕子. (2013). 『物語アメリカ黒人女性史(1619-2013) 絶望から希望へ』. 東京: 明石書店.
- 岩本裕子. (2015, April 10). 「こども学部・教員の活動『ミシェル・オバマ初来日』について」.
Retrieved August 31, 2018 from <http://www.urawa.ac.jp/news/23712.html>
- 岩本裕子. (2016, September 15). 「映画コラム第2回 映画『カラー・パープル』を観て、私の居場所を考えよう!」.
Retrieved August 31, 2018, from <http://www.urawa.ac.jp/news/29437.html>
- 岩本裕子. (2017a). 「2016年夏におけるアメリカ黒人女性の諸相: ハリエット・タブマンから『カラー・パープル』まで」. 『浦和論叢』. 56号, 31-66.
- 岩本裕子. (2017b, March 14). 「映画コラム第6回『第89回アカデミー賞授賞式分析2: 女優メル・ストリープ』」.
Retrieved August 31, 2018 from <http://www.urawa.ac.jp/news/31660.html>
- 岩本裕子. (2018a, March 2). 「映画コラム第12回『もう9月ですが…ドキュメンタリー映画『8月28日』』」.
Retrieved August 31, 2018 from <http://www.urawa.ac.jp/news/33494.html>
- 岩本裕子. (2018b, August 1). 「映画コラム第14回『ハリウッド俳優たちが提案する“Time is up!”という発想…』」.
Retrieved August 31, 2018 from <http://www.urawa.ac.jp/news/37076.html>
- 岩本裕子. (2018c). 「アメリカ映画の『暴力』性: 時代を映す『鏡』としてのハリウッド映画」. 『季論21』. 41号(夏号), 170-181.
- Fisher, Janon and David Knowles. (2018). Aretha Franklin (1942-2018): 18 Grammys / Civil rights icon / Medal of Freedom / QUEEN OF SOUL. *Daily News* (2018, August 17), 2-5.
- Gray White, Deborah. (Ed.). (2008). *Telling Histories: Black Women Historians in the Ivory Tower*. Chapel Hill: University of North Carolina Press.
- Hull, Akasha, et.al. (Eds.). (1982). *But Some Of Us Are Brave: All the Women Are White, All the Blacks Are Men: Black Women's Studies*. New York: The Feminist Press.
- Kreps, Daniel. (2018). 「アレサ・フランクリン葬儀、ステイーヴイー・ワンダーが熱唱『再び愛を偉大なものにする必要がある』」. (Mika Nakayama, Trans.). 『Rolling Stone Japan』 (2018, September 1). Retrieved August 31, 2018 from <http://rollingstonejapan.com/articles/detail/28942>
- Morris, Wesley. (2018). A Voice for Empowerment (More Than a Little Bit). *The New York Times* (2018, August 17), 1, 19.
- Pareles, Jon. (2018). Aretha Franklin, Fierce 'Queen of Soul,' Dies at 76. *The New York Times* (2018, August 17), 18-19.
- Sheehy, Katie et al. (2018). RESPECT: Farewell to Queen of Soul / Aretha Franklin (1942-2018). *New York Post*, (2018, August 17), 2-9.

Abstract

**The Heritage of African-American Women:
Focusing on Their Spiritual Message**

Hiroko IWAMOTO

But Some Of Us Are Brave: All the Women Are White, All the Blacks Are Men: Black Women's Studies was published in 1982 as a textbook for Black Women's Studies in the United States. As a result of the civil rights movement of the 1950s and 1960s, Black Studies and Women's Studies had received increased attention at universities all over the country in the 1970s. Nevertheless, during the 1980s, African-American women still were and today continue to be "hidden figures" in American society.

By focusing on their personal stories and the spiritual messages they incorporate, this paper will argue that within the heritage of African-American women we can find empowering messages that transcend the boundaries of ethnicity and nationality. With this paper, I also wish to pay tribute to the memory of Aretha Franklin, 'Queen of Soul,' who passed away in August 2018.

Keywords:

African-American women, story telling, Aretha Franklin